

数年来、東北大学考古学教室を主体として発掘事業が行なわれているが、多賀国府の附属寺院と思われる高崎廢寺跡が実証されて、国府の規模の大きさが確認された。高崎廢寺の遺構は、太宰府における観世音寺のそれとほぼ同一であって、寺院を附属せしめる官庁が時を同じくして東西に配置されていた事実は、中央政府の政治的意図の方向とその重要性をたしかにものがあるものである。陸奥国分寺址、多賀城址、黄金山神社の三地点は、それぞれの考古学的発掘調査によって緊密な関係のあることが知られ、この三地点の総合の上に東北の古代文化が解明されようとしている。その政治的軍事的な中心をなす多賀国府、多賀城もまさに「遠の朝廷」でなければならなかった。

桓武天皇から節刀を受けるほどの持節征東大使の任は重いものであったが、僻地にその不遇な生涯を終えた政治家家持と、青春の日から憧憬の対象であっただろうみちのくに老年ながらようやく迎りついた文芸人家持との二重にかさなった運命の苦渋さは、万葉園内

夷

一 序

その筆者を旅人かと推定される「遊於松浦河序」は「余以暫往松浦之原逍遙」という言葉から始まる。この「松浦之原」は松浦地方

における彼の作歌の中にすでに表徴されていたのではなかったか。彼の死にいたるまでの生涯の尺度を移して、逆に彼の万葉における歌風を量ることさえできるのではあるまいか。彼の生涯における真野とみちのく山と多賀城とにあらわされた「東への指向」とその意味の変化とは、青年期から越中守時代およびその後の円熟期をへて天平宝字三年にいたる歌風の推移にほぼ対応されるであろう。いわば、家持におけるみちのくは、その作歌の上に象徴的な意味を担っているのである。東の国はゆたかな民謡の地盤でもあったが、それと位相を異にするもう一つのみちのくの世界を、家持はみずからの詩の運命とした、といえるであろう。

〔附〕

本稿は、昭和四〇年六月一三日に行なった上代文学会・日本文芸研究会共催全国大会における講演「万葉の北方的性格」の、資料的説明や東国民謡への言及などいっさい省いた骨子だけを述べるにとどめた。

(40・10・8)

中 西 進

が料地たるをもつて称されたものであろうから、地方としての松浦の土地そのものを呼んだものと考えられる。これと同じ「あかた県」は歌中に「石ばしる淡海島の物語せむ」(7-1287)と用いられもするが、これも近江の土地そのものを意味する以外のものではない。

つまり王朝以降「田舎」の意に用いられる「あがた」は、まだ万葉集には登場しないのである。

「県」は元来、五鄙の謂である。ところがこの「鄙」も「県あがた」と同様に用いられているかという点、そうではない。この字の用いられるのは房前に「野鄙之歌（五八二序）、憶良に「鄙歌」（五八六八序）が見られるが、これらは何れも自身の表現であり「鄙」は「いやしい」意に用いられている。つまり先の「あがた」と異って土地を指すのみのものではなく、辺鄙なる土地が「いやしい」という觀念を物語るものである。我々はこの漢字に「ひな」という日本語を当てて、「ひな」は、田舎はいやしいという万葉人の考え方がこの「鄙」の周辺から浮び上がってくる。

我々にとってはごく当り前ではない、「田舎はいやしい」という「ひな」の意識は、万葉人にどのように存在したのか、この事を暫く考えてみたいと思う。

二 化外の土

万葉集の中に歌われた「ひな」という言葉はすべてで二十八ある。もっともこの内には同一歌の異伝が二首（三五五と五三六〇八、一三三二九一の内部併記異伝）あり、これらを除くと二十六例という事になる。そしてこれらは他の場合に比較するとまことに驚くべき、整然たる特徴を示している。これらを一一つ辿りながら「ひな」の分析を試みてみよう。

第一にその作者に関して巻十三を除くと悉くが作者を顕在させる歌に用いられている。従って所収巻も作者判明の十四巻中、巻八、十六、二十の三巻を除いてすべての巻に現われるという事になるが、その作者は全二十六回中次の如くなる（下の括弧は回数）。

人麿（3） 丹比笠麿（2） 金村（1） 憶良（1）

遣新羅使（1） 石上乙麿配流時歌（1） 家持（14）
池主（3）

やや曖昧なのは乙麿のものだが「石上乙麿卿配土左国之時歌」（六一〇一九）と題され、形はあくまでも乙麿のものだ。この外には先にも触れた巻十三の一首二例があるわけだが、もし巻十三を朝廷歌とすれば右の作家群と異界にあるものではない。これを含め得るならば「ひな」の意識はきわめて貴族的な意識だった事が明らかになる。乙麿のものも自身の作でなければその周辺の作である。巻十三のものも、全くこれと無縁な非貴族的世界のものとは考えられない。語の用例が二十六（八）をも数えながら、この中に七・十一・十二・十四の作者未詳巻の用例を絶つという事は驚くほど稀少な事である。それ程徹底して「ひな」の意識は貴族的であったといつてよいのである。

第二に、この二十八例は二例（一八四二一・一九四一七〇）以外すべて「離る」という言葉によって関連づけられている。二十四例は「天さがる」という枕詞を持ち、二例が「ひなさがる」と用いられる。ここでも右の二例に含まれるものの一つは巻十三のものであるが、

夷離国治めにと 或本云天さがる夷治離等（一三三二一九一）

という形であり、「ひな離る国」は「天さがる夷」であって、この二種が内容的に等しい事を示している。「ひなさがる」の他の一例は家持の十四例中最後のものであるが、

大君の命かしくみ夷放国を治むと（一九四二二四）

と言い、これに対して天平十八年の一首
天さがるひな治めにと大君のまけのまにまに（一七三九五七）

家持

天平十九年の二首

天ざるひなも治むる (17三九七三) 池主

天ざるひな治めにと (17三九七八) 家持

が同じ世界にあり、同じ表現の変形である。この先蹤は実は金村で神龜五年

大君の命かしこみ天ざる夷治爾登 (9一七八五)

と歌うものと同じである。右の状態、殊に家持の第一首と金村のものとを比較すれば、「天ざるひな」と「ひな離る」とは全く同じ内容のものたる事が、ここでも認められるのである。つまり「ひな」は遠く離れた土地であり、この対比は都にある。「ひな」が都を遠く離れたものであるという觀念においてほとんど例外も生じないというのは、これ又美事な整然さである。

この都との対比という事を、第三に家持について確めてみよう。家持の使用は越中時代に限られて、その前後には用いない。体験のしからしむる処であろうが、その天平十八年七月から勝宝二年八月までの間、ほとんど集团的に用いられるのを大きな特色とする。即ち、

1 天平十八年八月・九月 二回

2 同 十九年二月・四月 三回

3 同 九月 一回

4 同 二十年一月 一回

5 勝宝元年四月・閏五月 三回

6 同 二年三月・五月 四回

の如くであり十九年九月と翌年一月のものは例外となる。もっともこの間天平十九年六月・八月には家持は帰京しており十月・十二月はノートを欠いているので、現万葉集の表面はこの二首とて連続して登場するものではある。そして右の集団はそれぞれ必ず都との関連に詠まれるのが通例である。1は越中時代最初作で赴任の感

強い内に

天ざるひなに月経ぬ (17三九九九)

と歌い、次いで池主も「天ざるひなにある我を」(17三九五〇)と承ける。次いで翌月先掲の歌(17三九五七)は弟の長逝を京の便りによって知った詠である。2は病臥の中に詠んだ

天ざるひなに下り来 (17三九六二)

に始まり先掲天平十九年三月の二首、同四月の立山賦「天ざるひなに名懸かす」(17四〇〇〇)がある。次の五月には池主が

あをによし奈良を来離れ天ざるひなにはあれど (17四〇〇八)

と詠むが、これは池主が入京近く別離の歌である。この集団も立山賦は例外として都と結びついたものである。次の3は三ヶ月の京生活を経た帰任後の作で、「大君の遠の朝廷」と名に負う「天ざるひな」(17四〇一一)だというのである。4の一首は「天ざるひなとも著く」(17四〇一九)と明示する望京歌である。5は坂上郎

女の京からの贈歌に報えたもの、自らを「天ざるひなの奴」(18四〇八二)と称する。この一首は四月作か五月作か不明のものであるが、四月一日、彼は従五位下に昇任されていて、五月には広継が帰京している。朝参の君の姿を見ぬ事久しく「ひなにし住」むというのも、「儲作」の「向京時」の歌(18四二二)である。先立つ

同月の歌(18四一一三)も「天ざるひなに一日もあるべくもあ

るのは花妻に慰められるからだという。この一団はかかる任命や広

繩帰京によって湧き起ったものに違いない。6はやはり京の坂上郎

女に贈った長歌(19四一六九)とその反歌(19四一七〇)の「夷にしを

れば」(19四一八九)、先掲(19四二一四)で、これは京の興による

ものである。

以上によれば立山賦・水鳥の贈歌を内容的な例外として悉く京と

結びついたもので、かつそれぞれの集団は、着任、病臥から帰京、京との贈答、同僚の帰京、昇任といった京との関連の内に歌われたものであった。例外としたものもこの集団の中に含まれた一連の感情の中にあるもので、家持は越路を時折襲った望京の思いの中に「ひな」を意識していたのである。この点を憶良ははっきりと歌の上に天さがるひなに五年住まひつつ京のてぶり忘れえにけり

(5880)

と示している。これ又天平二年旅人帰任に際しての切なさによって歌われたものであった。家持にしても憶良にしても、単に地方にあったが故にのみ「ひな」の使用者となつたのではない。この京への思いとの緊密な連結を「ひな」の背後に考えねばならない。

第四に上にもあげた如く大半を作者判明歌とする上に年代がよく判る点でも「ひな」は特別であるが、

神龜五年(七二八) 1天平二年(七三〇) 1同八年(七三六)

1同十年(七三八) 1同十八年(七四六) 3同十九年(七四

七) 6同二十年(七四八) 1勝宝元年(七四九) 3同二年(七

五〇) 4

が年代判明のもの(下の括弧は西曆、算用数字は使用回数を示す)で残り七例は人麿の三例、笠麿の二例が藤原朝、他は卷十三の二例である。重複を除けば四回の藤原朝のものを除いて外はすべて神龜五年、七二八年以後に用いられた事となる。内、家持は十四回、天平年代のものは十三回と、何れも半数を占める。つまり「ひな」はほぼ後期万葉に発達した意識であつたというべきである。記紀には雄略記の景行宮の宮讀めの歌に「下枝はひなを負へり」(下、一〇一)、書紀、神代に「天離。ひなつ女」(三)と見え、かつこの歌は「今夷曲と号づく」と左注されている。歌詞を異にする記の方にも「此歌は夷振なり」と左注がある。歌詞に二度、左注に一度登場

するこの「ひな」を無視する事は出来ないし、万葉集でも人麿、笠麿と限られた人々ではあつても用いる作家のあるという事は、奈良朝以前から、この語の存した事を証明している。したがって既に前代から存した語を急速に発達せしめたのが奈良朝であつたという事にならう。

最後に第五として用字の特色がある。全二十八例の「ひな」は内十二例が正訓字、他の十六例が仮名書となつてゐるが、その正訓字はこれ又一つの例外もなく「夷」を用いる。「ひな」は上にも言つた如く卷五・十五・十七・十八に十六例も含まれるのであり、これが右にいう十六例である。即ち全一卷の仮名書という規制を蒙らぬものは悉く「夷」を記すのであり、非仮名書の諸巻中にも訓字に交つて仮名書のある事は周知の事実なのに、「ひな」はこれを仮名書にしよとはしないのである。全巻仮名書の巻に訓字を交える事はあり得ないのだから、その厳しい規制を受ける外はすべて「夷」であるといえる。かつ、卷十九の如く半ば仮名書、半ば訓字といつた巻にすら仮名書にはされていない。これらによれば以上のどの場合にもまして、徹底的に「ひな」は「夷」であつた事を物語つていよう。

「夷」は、いう迄もなく東夷である。より広く用いたとしても東にかかわらぬ蕃人の意である。これには冒頭に掲げた如き「果」や「鄙」の如き「いなか」の意はない。かかる字を今「いなか」に用いるのである。夷境、夷界の意に「夷」を用いる。ここには多少の無理もあろう。そうした無理をおかして「夷」を用いた事は、万葉人の「ひな」の認識を強く示すものと考えてよい。その認識とは、まず第一に、「夷」が化外の民である事だ。無論中華思想による語なのであるが、遠く文化の外にあって、野蕃な劣等なるものが「ひな」であつた。そして第二に、中国人にとつては「夷」は外国人なのである。即ち「ひな」は外国ですらあつた。化外の外国、それが

「ひな」への認識である。

そこで比較すべきは冒頭に掲げた「鄙」であろう。これは京を遠ざかった辺地であり、つまり「いなか」であり、いやしいものであった。この「鄙」をすら「ひな」に用いないという事は、「ひな」は単に僻地であるというだけではない、外国ですらあったという意識を知る。そして「ひな」は単に京と懸隔するが故に卑賤なるものではなく、根本的に文明を異にする、生い立ちの異なる化外の国なのであった。及ぶべき文化の、未だ及ばざる辺陬の地などではないのである。

万葉人における「ひな」は以上の如く見て来ると、末期万葉の中央官人たちが、その選民意識によって都に対比させたもので、人種をすら異にしかねない、化外の地たる認識に成り立つものである。そしてこの言葉が全万葉を蔽うものでない事をもってすれば、唯一、自意識でしかあり得なかつた。何という独善的なエリート意識であろう。

三 咲く花の匂うが如く

かかる「ひな」の自意識を支えたものは、しからは何か。彼らが自らのものとして許容する世界が、唯一京の文化であったという前提に立たねばならぬ。その文化のない処は自らの世界ではないのである。そうした関連こそ上に述べた夷と京との対比なのであるが、歌の内部に立入ってこれを求めると、人麿においてすら「夷にはあれど」（129）という。近江は京とは通常には成り得ぬのである。

「夷の長道ゆ恋ひ来れば」（3255・異伝歌1536〇八）の中には大和を望見した安堵が滲み出ている。安堵は、自らの安住の地を得たそれである。つまり夷には安住の栖はないという事だ。同様の事は笠麿についても言える。「たなびける白雲隠る天さがる夷の国

辺に」（45〇九）という彼の目には白雲の隔てる異境が夷であつた事を物語る。「丹比真人」が笠麿であるかどうかは不明でもあるし、作者未詳なる下注もあるのだが、その人麿に擬した歌は「天さがる夷の荒野に君を置きて」（2227）という。人麿の死に横わる場所が具体的に「荒野」であるというのではない。夷という荒野なのである。また上掲の如く憶良は五年の夷住まいの為に「京のてぶり」を忘れたという。「都会風」これを失ったところに夷がある。風俗を異にする地が夷だという。これと同じように家持も「朝参の君が姿」を見ないという。広潤の袖を翻して朝参する大宮人、かかるものない異俗の地が夷である。だから「天さがるひなの奴」たる我が京の「天人」に恋するというのも、強ち誇張のみとはいきれない家持の心情を掬すべきだ。そのような家持の受取り様は遣新羅使人が対馬にあつて「天さがるひなにも月は照れれども妹ぞ遠くは別れ来にける」（1536九八）と歌つたのと、さ程遠くはない。「月は照れれども」というのは極端に言えば夷に月の照るのを確認しているのである。夷は異つているという前提がある。やっぱり月が照り異なる事はないのに、という感懐が「も」という表現を味わう時に伝わって来る。以上のような彼らの気持を聞く時、万葉の「ひな」が根底とした化外の異土という認識は一層強く示される。この確固たる官人の意識は、京の文化の育くんだものである。

奈良朝の盛況を語る歌として周く援かれるのは次の歌である。

あをによし奈良の京は咲く花の匂ふがごとく今盛りなり
小野老（332八）

この歌は、しかし主題を奈良の讚美に置いたものではない。太宰府における望京の歌であり、夷における京の思慕である。つまり夷の基底にある意識を如実に示すのが「咲く花の匂ふが如き」京だという考え方である。咲く花の匂うが如き文化が万葉の「ひな」を生ん

だ。この老の詠唱に数年前立って神龜元年十一月の太政官の奏言は京師ありて帝王居と為す。万国の朝する所是れ壯麗なるにあらざれば、何を以って徳を表さむ。……五位已上および庶人の宮に堪ふる者をして、瓦舎を構立し塗りて赤白と為さしめむと告げている。壯麗なる京、絢爛たる風俗、それが彼らの世界である。こうした視覚的な情景のみではない。古今集にも継承される百敷の大宮人は暇あれや梅を挿頭してここに集へる

という風流が京にある。右の老の歌と並んで

藤浪の花は盛りになりにけり奈良の京を思ほすや君

大伴四繩(333〇)

と歌う。藤浪に彩られて京は美しいのである。ここでは自然すらが、あるべき京の姿として仕立てられている。自然が文化を模倣するといつてよい。

こういった彼らの美意識は、いう迄もなく唐土の文化によって構築されたものだが、具体的な作によって見れば、あれ程夷に執した家持は越中生活の終り近く

春の苑紅にほふ桃の花下照る道に出で立つ嬾婦(19四一三九)の名歌をなしている。勝宝二年三月一日の夕暮、春苑の桃李花を眺めやつた作である。この華麗な趣味は末期万葉の貴族を代表するものであるが、明らかに唐土文化に成り立つ美意識がある。垂拱中の進士として武后朝に出仕し、中宗・睿宗・玄宗三代に仕えて燕国公となった張説は憶良入唐時の長安三年魏元忠事件の時には三十七才であり、天平文化を形成する当時の唐に生きた文人であるが、その詩「桃花園馬上応制」(全唐詩四)(卷二九才)に次の如きがある。

林間豔色驕天馬

苑裏穠華伴麗人

願逐南風飛帝席

年年含笑舞青春

この前二行の好尚は正しく家持のそれと一致しよう。夷にある家持は空しい苑裏を一人眺めやつて幻の樹下美人を思い描くのである。彼をしてそう幻想せしめたもの、それが例えば右の張説の詩の如き好尚であり、その幻こそ夷なるものを規定した京の風俗であった。右の詩を多くの内の一つとして成立した唐土の美意識を唯一の美意識として家持の文化が成立し、それを京に擬する事によって「ひな」の意識が成立したのである。そしてこれが限られた人々の嗜好であるなら、かの憶良は「京のてぶり忘れにけり」とは歌わなかつたに違いない。等しく彼ら中央貴族が精神風土として疑わなかつたのが、右の家持に集約されたような文化だったのである。

「ひな」はただ右の如き文化を欠いていたに過ぎない。實質的に京とその他の地が甚だしい文化水準の落差をもつたという事ではない。にもかかわらずかかる「ひな」が誕生したという事は、地方が最新の唐風文化を持たなかつたという事である。そして、この中央の唐風文化なるものは、余りにも急速度に、やつぎ早に、導入され受容された為である。受容が目まぐるしければ目まぐるしい程、地方は常に地方である。その点をもってすれば、万葉集の「ひな」は外来文化によって生じたものだったという事が出来る。「ひな」人が「ひな」を歌わぬのは、そのゆえである。

四 結

先にあげた老と四繩との作に挾まれて、四繩は次の一首を歌う。

安見しし吾が大君のしまませる国の中には京し思ほゆ

(33二九)

この、この国土が天皇支配の地だという表現は、同じく旅人によつても繰返されている。

安見しし吾が大君のをす国は大和もここも同じとぞ思ふ

この歌は石川足人によって佐保を思うかと問われたのに対する答えであるから一種のポーズもあるが、何故にこれ程、此処も王地だという事を繰返さねばならぬのか。二首の全体の相違は別問題として、これを率土の浜までも王地だという気持を歌うものとする事は誤りである。「天雲のむかぶす極み谷ぐくのさ渡る極み聞こしをす国のまほらぞ」(5八〇〇)という憶良の詠唱とは異った心情だし、小督を探しあぐねた仲国の嘆きとは違って、今居る「ひな」が「夷」ではないという確認を自らに強い、又答えて誇示するのである。「夷」であればこそ、かかる句が「ひな」の歌に二度も登場するのである(憶良が同じ場所にあるが異なるのは、教学的立場に今立っているからである)。

こうした思想は極めて観念的なものである。観念的な「ひな」は中央貴族の自意識の中に、それが誕生したが故である。化外の異境であるという認定を自らに強いて、「ひな」の実体を何ら彼らが描き得なかったのは、「ひな」が、これ又観念的に想定された京と対比する観念だったからである。東歌の万葉集への導入は、この観念の殻を破って現実に入り込んだ貴族の、新しい試みという事が出来るが、それが文学の世界において実質的に対置される様を我々が認める事が出来るのは王朝以下の作品の中においてである。「ひな」を言う歌は、未だに「ひな」を文学には持ち込んでいない。「夷」として「ひな」を把える事は、一つには当時の天皇による国土支配が、まだまだ不完全であったという政治上の事情にもよる。それが率土の浜のごとく王地となった心情の上に、「ひな」はおとしめられながら、うらはらな新しいエネルギーを文学の上に与えるに到る。我々はその段階を王朝の物語まで見送らねばならぬようである。

かかる観念的な「ひな」は、京の文化的形成の上に生じた。絢爛とした唐風文化の京である。何がどうというのではない、京のまぶしさが、一層「ひな」の暗澹さを生み育てた。「ひな」が京への思慕の中でのみ姿を現わすのは、文化に彩られた京がまぶしかったからである。

高木市之助博士は「天ざかるひな」(「古文芸の論」所収)の中に於いて旅人を中心とする九州の歌を論じられ、風土的、位置的に「ひな」を把えられた。例えば旅人について「無常観を観念の世界から詩の世界に培養したもの、それが旅人における時処の体験ではなかったか」といわれている。風土なるものの文学への関与の仕方を含め定め据えられた卓論である。しかし旅人は風土から「ひな」を意識していない旅人が「ひな」に執する限りは、「ひな」の風土性を拒絶するのである。そしてその拒絶を蝕むように、無意識の旅人に忍び入った「ひな」の風土性が、博士の説かれるものであろう。無意識な風土性の忍び寄りがあったにせよ、万葉集の「ひな」の意識とはかく、唐風文化に対置するものだったのである。

(S40・9・16)